

令和元年6月18日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02898

研究課題名(和文) 20世紀中国における「民主」とは？ 自由と平等の相剋から考える

研究課題名(英文) What is "Democracy" in 20th century China ?

研究代表者

水羽 信男 (MIZUHA, Nobuo)

広島大学・総合科学研究科・教授

研究者番号：50229712

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本科研では1928年以後の中国について政治思想史の立場から考察し、近代中国の民主主義論では「平等」を重視する傾向が最終的には主流となったこと、そうした思想傾向に対して「自由」の価値を求める人びともおり、その多くは1949年革命以後も中国大陸にとどまったこと、その背景には、中国社会への彼らなりの理解があり、大きな力を持つ行政政府による社会改造への期待があったことなどを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の研究では、中国の民主主義の具体的な意味内容について具体的な分析が十分ではなかった。しかし本科研では1949年革命で中国史を断絶することなく、民主主義思想史として20世紀中国における連続性に注目することで、今日の中国の「民主」論を再検討するための視点を導くことが出来た。また中国知識人の民主主義思想の形成の「母体」ともいえる中国の基層社会に対する理解についても、初歩的ながら検討し学界に新たな知見を提供できた。

研究成果の概要(英文)： I examined Modern China from the perspective of political thought history. The conclusion is as follows. (1) In the "democracy" theory in modern China, the tendency to emphasized "equality" eventually became mainstream. (2) But Some Intellectuals sought the value of "freedom" against "equality", Many of them remained in mainland China after 1949. (3) The background was that they had their own understanding of Chinese society, and there had been hope for a reform of society by a powerful government.

研究分野：中国近代史

キーワード：民主主義 自由 平等 雷海宗 費孝通 俞可平

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 20 世紀の新儒家と呼ばれた張君勱たちから、共産主義者の毛沢東、さらには近年の「アジアの価値」論者まで、さまざまな立場の知識人が「民主」について論じてきた。もともと中国では「君主」に対する政治的立場を示す言葉として「民主」が主張されたという歴史的背景もあり、その内容は西洋起源の Democracy とは、異なる部分もあった。従来中国近現代史研究では、こうした特徴が指摘されはしたが、その具体像の分析は不十分だといわざるを得なかった。

(2) 一般に民主主義社会の成熟には、経済発展にともなう市民層の形成が必要とされるが、中国近現代の知識人が自身の「民主」論を形成する前提には、本国の民衆の生活空間に対する理解がある。すなわち民主社会を担う政治主体の形成の程度をどのように考えるかによって、「民主」をめぐる言説は変化してゆく。だが、こうした問題関心から知識人の基層社会認識にまで踏み込んだ分析は十分ではなかった。また 20 世紀中国における基層社会認識の深化には、日本の学术界の影響を無視できないが、この点についても今後の課題となっていた。

(3) 「民主」像は国内に対する認識だけでなく、当然、当該時期の国際情勢に対する認識にも左右される。本科研で扱ったのは、日中全面戦争、そして戦後の国共内戦から、朝鮮戦争という戦争の時代でもあったが、対外戦争のみならず、国共内戦も国際情勢と密接な関連をもっていた。したがって中国近現代の知識人の国際情勢観もまた重要な検討課題であるが、この点もさらなる検討を待っていた。

### 2. 研究の目的

(1) 20 世紀中国の民主主義思想の特質を自由と平等の相剋から解明することを目的とする。すなわち個人の自由を何よりも尊重する立場からいえば、平等の強調は「大きな政府」を求める立場となり、バーリンのいう「消極的自由」を阻害する側面も出てくる。他方では、個人の自由はまずは相応の社会福祉制度の充実を前提とするのであり、格差社会の是正のためにはバーリンのいう「積極的自由」が重要だと強調する人びともいる。これを「民主」論との関連からいえば、当面の政治課題として、政治的民主と経済的民主のいずれをより重視するのか、という問題である。本科研では、中国の近現代の知識人の言説を上記の問題関心から検討することとした。

(2) 具体的には、1949 年革命で中国史を断絶することなく、民主主義思想史として 20 世紀中国における連続性に着目する。かつては 1949 年革命を肯定的に評価するか否かは別として、国民党の中華民国の台湾への移動、中国共産党を中心とする中華人民共和国の大陸での成立をもって、中国の現代史の始まりとみなしてきた。しかしながら、たとえば中国社会を改革するためには、一党独裁が必要であるという政治的立場は、その担い手をめぐって内戦が戦われたとはいえ、1949 年前後を通じて一貫しているのである。

(3) なお、中国知識人の民主主義思想の形成の「母体」ともいえる中国の基層社会に対する理解については、日中両国の知識人の中国基層社会認識における交流の影響も重要である。この点についての検討も、目的のひとつとする。

### 3. 研究の方法

(1) 民主主義 (Democracy) は本来、多数者による支配を意味していた。だが多数者がいつも正しいわけではなく、自由主義 (Liberalism) の核心的な価値である「個の尊厳」が、少数者であるがゆえに侵害されることも、歴史上、繰り返された。それゆえに政治哲学の分野では、Democracy と Liberalism との緊張関係も考察の対象とされ、さまざまな論点が提起されてきた。本科研でもこの点に留意する。

(2) 自由主義 (Liberalism) とはさまざまな解釈がなりたち、自称リベラリストの間でも厳しく対立することがある。本科研では広く「個の尊厳」を守ることを第一の課題とする人びとを、リベラリストと定義して議論していった。そのリベラリストの多くは、中国では第三勢力と呼ばれることになった。すなわち、両党に対して自律性と独自性を保った人びとという意味である (ただし、国民党と共産党の内部のリベラル派の存在を無視することはできない)。

(3) 以上の点を踏まえ、初年度は中華民国国民政府時期 (1928 ~ 1937) のリベラリストの言論活動をとりあげた。当時は国民革命 (1924 ~ 1928) を経て、国民党による一党独裁のもとで国民国家の形成が一定程度進み、それゆえにその民主的な変革をめざす動きが、さまざまな領域で始まった。その際、自由と平等をめぐる、各政治勢力・知識人からは、多種多様な意見が提起されたが、平成 27 年度はこうした動きを章乃器や王造時らの言説を中心として、検討していった。章乃器や王造時らは国民党左派とも密接な関係を持ち、のちには抗日運動をリードし、やがて共産党を支持するに至る、いわば容共的なりベラリストである。また彼らと当時の日中

の学術交流も、今日の我々が想像する以上に深いものがあった。

(4) 平成 28 年度以降は 1937～1945 年までのリベラリストについて検討し、ついで 1945 年～50 年代まで検討を深めていった。すなわち日中全面戦争の開始から、戦後内戦を経て、朝鮮戦争を契機とする中華人民共和国の過渡期の総路線の提起までである。また 21 世紀に入ってから現代中国についても、可能なかぎり考察した。この 1930 年代から 50 年代半ばまでという時期は、49 年の革命を挟んではいるが、中国における「総力戦」の時代であり、「強制的均質化」(Gleichschaltung)が進む時期であった。当時、自由と平等は、戦争遂行とかかわって極めてプラクティカルな論点となったのである。それゆえ、従来、政治的な発言を控えてきたリベラリストの発言も目立つようになった。具体的には費孝通らを取りあげ、平成 28 年度以降は彼らの議論を分析した。また当時の日本では政府の対中政策を理論的に裏付けるために、中国基層社会への言及が増えたが、それらの中国への影響についても考察する。

(5) 科研期間を通じて研究に必須の新たに公開された史料を購入するとともに、国内および海外での史料調査を行った。特に海外史料調査に際しては、今日でも比較的史料公開状況が良好である上海市檔案館を中心とした。

#### 4. 研究成果

(1) 平成 27 年度は中華民国前期における自由主義者のうち、章乃器や王造時らの「救国論」を取りあげた。本科研では、その「救国」論の前提には、対内的には中国社会をどのように理解するかについての論争(中国社会史論戦など)があったこと、またワシントン体制下にあった国際関係に対しても、冷徹な分析が必要とされたことなどを明らかにした。具体的には当時の中国社会については、「民族資産階級」とよばれた、形成期にあった中国の商工業者の政治変革への傾向性や農村における政治主体の形成如何が問われ、国際社会については、先進資本主義国の中国への進出の国内政治への影響をどのように評価するかが問われた。本科研では章乃器ら自由主義者のなかには、商工業者の軟弱性と農村の疲弊、そして先進資本主義国の中国侵略への根強い不信感があったことを明らかにした。

(2) 平成 28 年度は考察対象時期を日中戦争時期(1937-1945)へ進め、リベラリストについての検討を深めた。具体的には、日本占領下での研究・教育を嫌い、雲南省昆明市で西南連合大学に集った知識人を取りあげた。具体的には表で示した人びとである。彼らは国民党や共産党とは異なる第三勢力のリベラリストであった。

表：昆明の主要リベラリスト

姓名	略歴	1949 年以後
銭端升	清華大学卒業、アメリカ留学。政治学者	大陸
王韓愚	清華大学卒業、アメリカ留学。政治学者	大陸
潘光旦	清華大学卒業、アメリカ留学、優生学を中国で広める。	大陸
王信忠	清華大学卒業、日本留学 日中関係などを論じる。	不明
伍啓元	滬江大学卒業、イギリス留学。経済学者。	台湾
費孝通	清華大学卒業、イギリス留学。中国に文化人類学を導入。	大陸
羅隆基	清華大学卒業。イギリス・アメリカ留学。中国民主同盟の指導者。	大陸
雷海宗	清華大学卒業、アメリカ留学。歴史学者	大陸
沈從文	兵士出身、留学経験無し。文学者。	大陸
呉晗	清華大学、留学経験無し。歴史学者。	大陸

表は水羽の研究および中村元哉『中国、香港、台湾におけるリベラリズムの系譜』(有志舎、2018 年)をもとに作成した。

本年度の研究では、彼らの「民主」をめぐる言説を自由と平等の相剋という視角から広く整理し、次年度の研究の基礎とした。

また現代中国の民主主義論を検討するために、胡錦濤のプレーンともいわれた俞可平の言説についても検討した。というのも、1930～40 年代の中国の民主主義思潮史を現代的な問題関心から問い直すためには、今日の中国の民主主義をめぐる言説空間の分析が必要だと考えられるからである。その結果、今日まで続く中国のリベラリストの知的営為の特質の一端が明らかになった。

(3) 平成 29 年度は民国時代の知識人のうち費孝通らの中国社会論を本格的に分析した。というのも、「中国知識人の民主主義論の形成の「母体」ともいえる中国の基層社会に対する理解」を深く考察することが本科研の目的の一つであったが、費孝通らの議論はその検討のための好個の素材であったからである。分析に際しては、日本における社会科学の発展の影響を強く受けた左派論壇の中国社会性質論争などの成果と、費孝通らの基層社会論との比較を行い、費らの議論が先行する左派論壇の認識を批判的に克服するものであったことを明らかにした。また

本科研のもう一つの目的である「1949年革命で中国史を断絶することなく」理解するという課題に取り組むために、1957年の「百家争鳴・百花齊放」と呼ばれた中国共産党の言論の自由化政策が、一転、「反右派闘争」という形での言論弾圧に転換することの意味を初歩的に総括した。

(4) 平成30年度は考察を中華人民共和国時期にまで広げ、1954年の第1回全国人民代表大会選挙をとりあげた。検討の結果、リベラリストおよび商工業者は共産党権力の社会への浸透のなか、政治主体としての意識に基づき、困難な状況のなかでも一定の政治的成果をあげたことを確認した。また本年度は本科研の最終年度でもあり、中国の「民主」を自由と平等の相剋のなかで考えるというテーマのとりまとめを目指した。そのために先行研究をいまいちど検討し、その成果と課題を明らかにした。

総じて本科研では、近代中国の「民主」論では平等を重視する傾向が最終的には主流となったこと、そうした思想傾向に対して自由の価値を求める人びともいたが、その多くは1949年革命以後も中国大陸にとどまったこと、その背景には、中国共産党の「新民主主義」論への信頼とともに、中国社会への彼らなりの理解があり、大きな力を持つ行政府による社会改造への期待があったことなどを明らかにした。

## 5. 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計9件)

- 水羽信男「リベラリズム(自由主義)史の研究」『研究中国』第7号、2018年、4-9、査読有  
水羽信男「社会と選挙 1954年の人民代表大会選挙を中心として」中村元哉編『憲政から見た現代中国』東京大学出版会、2018年145-167頁、査読有  
水羽信男「リベラル派知識人の国際情勢観」波多野澄雄・久保亨・中村元哉編『日中終戦と戦後アジアへの展望』(日中戦争の国際共同研究6)慶応義塾大学出版会、2017年、171-182頁、査読有  
水羽信男「1957年の中国を見つめ直す意味」『研究中国』4号、2017年、59-63頁、査読有  
水羽信男「中国知識人の「社会像」 1930～40年代の王造時・章乃器・費孝通を素材として」笹川裕史編『戦時秩序に巣喰う「声」 日中戦争・国共内戦・朝鮮戦争と中国社会』創土社、2017年、121-150頁、査読有  
水羽信男「中華民国における「民主」をめぐる「歴史の語り」」田中仁編『21世紀の東アジアと歴史問題 思索と対話のための政治史論』法律文化社、2017年、36-50頁、査読無  
水羽信男「現代中国のリベラル思潮をめぐる歴史的考察」へ向けて」『アジア社会文化研究』18号、2017年、187-197頁、査読有  
水羽信男「実業界と政治参加 第1回全人大と中国民主建国会」深町英夫編『中国議会100年史 誰が誰を代表してきたのか』東京大学出版会、2015年、153-168頁、査読有  
水羽信男「1930～1940年代中国のリベラリズム 愛国と民主のはざままで」石井知章編『現代中国のリベラリズム思潮 1920年代から2015年まで』藤原書店、2015年、421-446頁、査読無

### 〔学会発表〕(計6件)

- 水羽信男「中国自由主義知識分子对“二戦”的看法」(中央研究院近代史研究所胡適研究群 學術講演会/台北、近代史研究所大樓一樓會議室、2018年11月14日)  
水羽信男「中国知識分子的“社会論”」(第3回“西南聯大与現代中国”国際學術研討会/昆明、蓮花賓館、2018年10月31日)  
MIZUHA, Nobuo, “The Perspectives of Chinese Liberal Intellectuals on World War II” (*Remembering World War II in Europe and East Asia* / ウィーン、Austrian Academy of Science、2017年8月30日)  
水羽信男「1930年代における中国知識人の「社会像」」(中国基層社会史研究会シンポジウム「戦時戦後東アジア諸地域の激動と“社会像”」/上智大学、2016年12月3日)  
水羽信男「“戦国策”派的国際情勢観(“近代中国与東亜 新史料与新視点” 學術研討会/杭州、浙江工商大学、2016年11月19日)  
水羽信男「リベラル思潮をめぐる歴史的考察」(日本現代中国学会関西西部会大会共通論題「流動化する中国の行方」/龍谷大学、2016年6月4日)

### 〔図書〕(計1件)

- 水羽信男編『アジアから考える』有志舎、2017年、1-272

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。